読者のページ

市史の焦点と資料館

財政局　青木茂夫

調査季報五十八号で特集として都市における資料館が取り上げられ、本市における同種資料館についてもその概要が伝えられていた。私もこの建設には強く賛成するものである。

だが伝えられる資料館構想については、両手をあげて賛成できない点がある。特集の中で多くの筆者が開港後の資料収集・展示を中心として述べている。しかしこの発想は横浜市史イコール開港史でないことを考えると正鵠を射てないと思う。

横浜には、神奈川・保土ケ谷・戸塚のように東海道の宿場町として栄えた歴史をもつ都市があり、また鎌倉時代からの歴史を背負う金沢が存在する。これらの町は、独自の歴史を有するはずであるのに、横浜市の戸塚区であるがために横浜村の発展史の陰に隠れて、重点が置かれずにきた。

従来の横浜市史は、開港後の歴史に力点が置かれ、このことは、必然的に中・西区周辺の変遷を多く語ることにつながっている。しかし、横浜の中には、異種の歴史が存在し続けてきたと考える方が、自然なのであるから、資料館建設構想を機に市史の分類を試みてよいと思う。資料館への資料収集は、市史の焦点をいかに定めるかということと無関係ではありえない。この点で、特集のうち遠山市大教授の提言は傾聴すべきものがあった。

今度の資料館を開港後の歴史に限って収集・展示するなら、それはそれなりに意義あるものであろう。しかし、そう撤底するなら置き去りにされる歴史の顔を、次の機会には、その地区にふさわしい形で建設する必要があると考える。

ある日の研修所

総務局　西池　伸弥

所は野毛山にある職員研修所の一室、机の上に広げられた大きな模造紙の前に、七、八人の男達が腕組みをして立っている。その模造紙には何十枚ものカードが張られ「横浜市の現状と将来」といった何ともいかめしいタイトルが付けられている。

様々な職場から集まってきた連中がただテーマだけを与えられて、頭に思い浮ぶままをカードに書き取ったものである。今こうやって並びかえてみると、一応もっともらしい表になっているのだから不思議というほかはない。もっとも彼等に言わせれば、研修時間だけでは足りなくて、夜、自主的に討議を重ねたのだという。そう言われてみれば、彼等の回りにはどことなく悲壮な雰囲気が漂っている。

以上は、目下実施中の「政策科学入門」のひとコマである。複雑な都市問題の現状を分析し将来を予測するため、システム分析という手法を学ぶことを目的としている。現在、研修生は先に掲げたテーマに沿って、コンピュータ・シミュレーション・モデルを作って、政策実験を行うところである。いずれ大胆不敵な政策提言として、この調査季報に掲載されることもあろうと思うので、読者諸兄も大いに期待して頂きたい。

先の調査季報に載せられた自主研究グループによる「地域特性分析」といい、最近、本市にも遅ればせながらシステム分析に関心が高まってきた。しかしながら、これらの芽を育てるには、コンピュータの高度利用、統計資料の整備そして何よりも管理職や周囲の理解、協力が必要であろう。この点、本市はまだまだ条件が整っているとは言えない状況である。

訂正

前号（59号）に次のような誤りがありましたので、訂正しておわびします。

▽8頁『防災と都市緑地』の執筆者、川名俊次氏の肩書き「公害防止事業団専務理事」は「常任顧問」の誤り▽同頁図1・防火効用→防災効用▽11頁2段6行・多重の→多量の▽13頁1段7行・としている→としている※6▽同19行・カン類→カシ類▽2段3行・災上→炎上▽14頁3段11行・調査※1→調査※2▽41頁図6と45頁図9の図を入れかえ▽50頁4段10行・高さ一〇メートル→一・〇メートル▽86頁〈あとがき〉横浜線→横浜の緑

〈あとがき〉

盛り場は都市の顔であると同時に都会生活に潤いを与えてくれるオアシスでもある。そこには猥雑さやばさが混在し人間の匂いがある。それが盛り場の魅力となっているわけだが、都市の安全性や美観などと両立しにくいところにこの問題のむずかしさがあるようだ。〈多根〉

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。